

堤中納言物語における編次の研究

土岐 武治

一

堤中納言物語の諸写本に伝へる十篇の配列順序は、その本に

よつては異なるものもある。今これら諸本に伝へる本物語十篇の次第を種類別に整理して示せば次の通りになる

(イ)契沖校本	(ロ)池田亀鑑博士藏 榎原忠次旧蔵本	(ハ)尊経閣蔵 元禄本	(ニ)天理図書館蔵 岡本麟校合本	(ホ)高松宮家 御所蔵本	(ヘ)流布本
このついで	このついで	不知題号	はいずみ		花ざくら折る 少将
はなざくらを る少将	花桜をる少将	花ざくらをる 少将	ほど／＼のけさう		このついで
よしなしごと	ほど／＼のけさう 逢坂こえぬ権中納 言	かひあはせ	このついで		虫めづる姫君
むしめづる姫 君	かひあはせ	はいずみ	貝あはせ		ほど／＼のけ さう
ほど／＼のけ さう	かひあはせ	あふさかこえ ぬ権中納言	はなだの女御		逢坂越えぬ権 中納言
はいずみ	よしなしごと	むしめづる姫 君	あふさかこえぬ権 中納言		貝あはせ
はなだの女御	虫めづる姫君	このついで	花ざくらをる少将		思はぬ方にと まりする少将
かひあはせ	はなほだの女御	ほど／＼のけ さう	よしなしごと		はなだの女御
あふさかこえ ぬ権中納言	思はぬ方にとまり する少将	おもはぬかたに とまりする少将	むしめづる姫君		はいずみ
おもはぬかたに とまりする少将	はいずみ	よしなしごと	おもはぬかたにと まりする少将		よしなしごと
備考	高松宮家御所蔵本には十篇の配列順序がない。				

旧来堤中納言物語の目次について、藤田徳太郎氏は、新潮社発行「日本文学講座」第八巻収載「堤中納言物語研究」の中で、「以上述べた事によつて、四季の順序に置かれた現行本の順序は、その意味で正しいと認められるべきであると思ふ。」と言つてゐる。氏の所説によれば、流布本に見える十篇の配列順序をもつて原本のそれと看做してゐるのであるが、従来彼が言ふ如く、堤中納言物語十篇の並べ方は、流布本をもつて正当なものと見て来たのである。ところが、いま仮りにこの旧説を肯定したならば、十篇の順序に次のやうな季節の食違ひを指摘せざるを得なくなる。すなはち、

その一は、本物語初篇の「花ざくら折る少将」には、所々の花の木どもゝひとへにまがひぬべくかすみたり。いますこしすぎてみつるところよりも、おもしろくすぎがたき心ちして、そなたへとゆきもやられずはなざくらにはふとかげにたびたゞれつゝ、などの本文があつて、本物語の背景は桜の時候となつてゐる。しかるに第二篇の「このついで」では、

ひんがしのたいのこうばいのしたにうづませ給ひしたきもの、今日のつれづれに心みさせ給ふとてなん、とて、えならぬえだにしろがねのつば二つつけたまへり。

とあつて、この物語の季節は梅の時候なのである。もし旧説通り堤中納言物語十篇が四季の順に配列したものであるなら、当然「このついで」の方が十篇の冒頭に來なければならなくなる。

その二は、第三篇の「虫めづる姫君」の本文中に、

堤中納言物語における編次の研究

中にもかわむしの心ふかきまじたるこそ心にくけれとて、あけくれはみゝはさみをして云々

とあり、また右馬の助が姫君に作りものゝ蛇を贈つてからかふ場面の一文にも、

おびのはしのいとをかしげなるに、くちなはのかたをいみじくにして、うごくべきさまなどしつけて云々

と見える。このやうに毛虫とか蛇の出盛る時候は真夏であらう。しかるに第四篇の「ほど／＼のけさう」には、

まつりのころは、なべていまめかしうみゆるにやあらん、あやしきこずへのはじとみも、あふひなどかざして心ちよげなる云々

とあつて、この短篇物語は加茂祭の頃、すなはち季節的には初夏なのである。従つて「虫めづる姫君」と「ほど／＼のけさう」との季節の順序も反対になつてゐることになる。たゞ第五篇の

「逢坂越えぬ権中納言」では、五月まちつけたるはなたちばなの云々

とか、

つちさへわかれてゐるひにもそてほすよなく（「みなづきのつちさへさけて照る日にもわが袖ひめやいもにあはずして」を引用）おほしくづはるゝ。十日よひの月くまなきに云々

とある。よつて「逢坂越えぬ権中納言」の背景は五月から六月にかけての物語なのである故に、「ほど／＼のけさう」の次に「逢坂越えぬ権中納言」が並べられても別に問題にはなるまい。また第六篇の「貝あはせ」の文中に

ながつきのありあけの月にさそはれて云々

とあるので、この物語は秋九月頃となる。従つて流布本においては「逢坂越えぬ権中納言」の次に、第六篇の「貝あはせ」が配置されても当然な順序となる。

その三は、第七篇の「おもはぬ方にとまりする少将」の文中に

人ごころあきのしるしのかなしきにかれゆくほどのけしきなりけり
とか

ときはなるのきのしのぶをしらずしてかれゆく秋のけしきとや思ふ
とあつて、この物語は晩秋の時節となつてあるところが第八篇の「はなだの女御」の本文には、

かのせんざいどもをみ給へ。いけのはちすのつゆはたまとぞみゆる
〔蓮葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく〕 古今集卷
三夏歌に見える僧正遍正の歌を引く。

と見える故に物語背景は夏かと思へば、他方同物語文中の諸処に色々な秋の草花が取り入れられてある。このやうな事情から該篇の時候を推測すれば、「はなだの女御」の季節は夏から秋にかけてであらう。なほ「はなだの女御」の作品は季節的には前篇の「貝あはせ」や「思はぬ方にとまりする少将」より早いものではなからうか。

その四は、第九篇の「はいずみ」の時候は判然としないが、たゞ該物語の文中に

さらばそのむまにても、よのふけぬさきに

とか

よろづはのどかにきこえん。夜のあけぬさきに
とか見える。これらの文中の「よのふけぬさきに」・「夜のあけぬさきに」の用法は、伊勢物語五十三段に、

むかし、男あひがたき女にあひて、物がたりする程に鳥の鳴きければ、
いかでかは鳥のなくなむ人知れず思ふ心はまだ夜深きに（この歌統
後撰集にも出て、業平朝臣と詞書してある。）

とある本文の「夜深きに」と同じ雰囲気と思はれる。案ずるにこれらはいづれも短か夜の五六月頃を意味するものではなからうか。もしさうだとすれば、十篇の順序として「貝あはせ」や「思はぬ方にとまりする少将」より前に配置せねばなるまい。たゞ第十番目の「よしなしごと」では、

としのはてに、やまでらにこもるとて云々

と見えるので、この「よしなしごと」の時節は年の暮れとなるから、従来言はれてゐる季節による配列の順序から見れば別該篇は問題にならない。

以上の如く堤中納言物語に於ける流布本の目次を四季の順に並べたものであらうと推測する場合、諸処に甚しい矛盾を認めざるを得ない。元来流布本の配列順序を持つ諸写本の多くは、諸本の系譜上第二門系統に属するものである。この第二門に所属する諸伝本の性格については、雑誌立命館文学昭和三十一年三月号所載拙稿「堤中納言物語の伝本研究——第二門第二類について——」に詳述の通り、当該諸門には善本と認め得るもの

は極く稀で、殆どは第一門に所属する十冊本の末葉写本ばかりと言つてよからう。ところで、堤中納言物語の研究に不可欠の善本は、物語十篇の配列順序が右の流布本のそれと異なる種類の本、すなはち契沖校本、榊原忠次旧蔵本・尊経閣蔵元禄本・天理図書館蔵岡本贗校合本、及び高松宮家御所蔵本などである。しかも、これらの諸写本は現存の堤中納言物語諸本中では、一般に古体に属するものばかりとなつてゐる。このやうな価値を持つ右の諸写本相互の本文内容・成立の事情・奥書その他本の由来などから比較して、これらの中のいづれの本が最も優位であるかを判断する時、それは契沖校本であり、また後段でも論述する如く、本物語十篇の配列順序の原型も亦契沖校本に伝へる目次であるのである。この第一門第一類の契沖校本の最も優位な理由については、さきに国語国文昭和二十九年四月号所載拙稿「堤中納言物語における契沖校本の確立とその研究」や典籍自第十七号至第二十一号所載拙稿「十冊本堤中納言物語とその研究」並びに本書第二編第二章第一節第一門系統本などに詳述してゐるので、本論ではその重複を割けて再び論述せぬことにする。たゞ本文上契沖校本の文章のみにあつて、他本には見えぬ価値ある個所のみを列記して、このグループの諸本は如何にすぐれてゐるかの一端を明示することにした。

(イ) みなをがうらにかるなるみつぶきむしろにまれ云々。(よしなしこと)

(考異) (1) みつぶきむしろーみつちさ李花亭本、みつぶさむしろ

堤中納言物語における編次の研究

諸本。

(田) おやさだにあらせ給へともたちていへば、おとこあはれたれもいづちやらまし云々。(はいずみ)

(考異) (1) をもちてーをしちちて諸本。

(2) たれもーかれも諸本。

(イ) つねにあそびがたきにてはあれど、なごりなくこそきゝやうはつねにうとむれ云々。(はなだの女御)

(考異) (1) うとむれーうらむれば榊原本(十冊)・九条家本・旧広島師範本・嘉永本・前田家天和本・書院部本(十冊)・天理図書館蔵岡本贗本・岩瀬文庫本・山田常典本・富士谷御杖本・島原本、うらむれ諸本。

(ニ) いたらぬぎと人などは、いともてはなれていふ人をばいとをかしくいひかたらひ云々。(はなだの女御)

(考異) (1) さと人ーさとへ諸本

(ホ) たごこのいたるとの(1)にしとむきて、ねんじあへるかほおかしけれど云々。(貝あはせ)

(考異) (1) しとむきてーしもむきて諸本。

(ト) とくかへりてこれをかたせばやおもへど、ひるはいづべきかたもなければ云々。(貝あはせ)

(考異) (1) これをーいかでこれを諸本。

(チ) うれしくてかうぞばかりきこえねよとて、ふところよりおかしきこ

はこをとらせて云々。(貝あはせ)

(考異) (一)きこえねよきこえねよ諸本。

右にあげた例文の傍線語句は、他の諸本に見られぬ特徴を示してゐるばかりでなく、これらの本文に拠つて、従来の註釈の誤謬を正し、もしくは難解の部分を知り得るものが甚だ多いと思ふのである。

二

いま行文の必要上、前掲の図表より契沖校本の配列順序を左の要領で記載することにする。

(イ) このついで
はなざくらをる少将

(ロ) よしなしごと
むしめづる姫君

(ハ) ほど／＼のけさう
はいずみ

(ニ) はなだの女御
かひあはせ

(ホ) あふさかこえぬ権中納言
おもはぬ方にとまりする少将

案するに、これら十篇の配列の趣向は、相対する二篇をそれぞれ対偶的な関係に配置したものと考へるので、右の二篇一対を表す(イ)(ロ)(ハ)(ニ)の順位に従つて以下それらの事情を具体的に解説することにする。

(イ)の「このついで」の物語の筋は、第一話の恋愛・第二話の厭世・第三話の出家といふ三見聞談から構成されてゐる。しか

も全体の内容は和歌的情緒で統一されてゐるのである。この物語に對し、「はなざくらをる少将」では、物語主人公の少将が築地の崩れ果てた家に美しい故源中納言の姫君を見初めたのである。ところが、この姫君は近く宮中に差し上げられるやうになつたので、少将はそれ以前に彼の女を手に入れたと考へ、ある夜女の家に行き、母屋の暗がりに休む女を抱き上げ、車に乗せて帰つて見ると、何んとそれは似もつかない姫君の祖母の尼君であつたといふのである。全般的にこの物語は何処までも優美的な雰囲気の中に筆を運んでゐるのだが、物語の末尾に意外な滑稽さを演じさせ、しかもその笑話がこの物語の頂点といふ仕組みとなつてゐる。

「このついで」と「はなざくらをる少将」とは、共に貴族的情趣的な色彩を持ちながらも、前者の主体は三話を貫く余情の物語であり、後者のそれは物語の末尾に配する機智となつて、前者と対偶的な関係に置かれてゐる。また物語の背景となる趣向も一方は梅の季節であれば他方は桜の季節といふ相対する趣向が見られるのであるが、元来「このついで」と「はなざくらをる少将」との二話一類において、前者は梅、後者は桜といふやうに、両者とも春のものでありながら、「このついで」は年の始めの紅梅となつてゐる。このやうな事情から十篇の最初に「このついで」を配し、その上、堤中納言物語の編者が「このついで」を巻頭に配置した第二の理由としては、私ははやく雑誌説林昭和二十六年自十一月至十二月号拙稿「堤中納言物語考」

の上下で説く通り、物語の編者は「このついで」を大和物語第百三十四段に伝へる堤中納言兼輔と三条右大臣定方の女との情話と同一視し、しかも編者は、堤中納言物語全篇をいづれも兼輔自作によるものと考へたらしいが、十篇中「このついで」を他の九篇のいづれの説話よりも最も気に入つたために以上の如き配列になつたものであらう。

(四)「よしなしごと」物語の梗概を述べると、ある僧侶が旅先での用具を贈つて貰ふために自分の弟子の女に色々と要求するといふ書簡体の物語なのである。つまり物語の主人公は法衣の僧でありながら、高位高官の身分に匹敵する衣食住などを相手に求めて、俗世の物欲に捉はれるといふのに対し、「むしめづる姫君」では、物語の主人公である姫君は「人々のはなてふやうめづるこそはかなくあやしけれ、人はまことありほんぢたづねたるこそ心ばへをかしけれ」と言つて俗物を排するのである。このやうに、かの「よしなしごと」の僧は法螺のやうな多方面の品々を要求すれば、この「むしめづる姫君」の主人公は逆に異常的なものの根源を窮めようとする対照が見られる。

(五)「ほど／＼のけさう」物語の筋書は、ほど／＼の身分に依じた三階級の恋愛様相を描きながら、葵祭を背景に作者の感懐を添へた作品である。つまり頭の中將・若い男・小舎人童といふ主従関係にある三階級の男性たちが、八条殿の姫君・女房・女童といふ三階級の女性たちに、それ／＼身分相応に懸想し合ふのである。一方「はいずみ」では、下京に住むある男が、長

年同樓の女を振り捨て、例の忍び通つてゐる名門の娘を引き取るやうになつた。ある日の昼頃、男は突然新しい女を訪ねて行くと、うち寛いでゐた女は慌てて化粧し出し、おしろいと灰墨とを取り違へて顔に塗りつける。男はこの有様にあきれてしまひ、たう／＼帰つてしまつたといふ筋書きなのである。この物語の前半は「ほど／＼のけさう」と同じ情趣的に書き出されてゐるが、後半は以外な滑稽を演ずる物語の頂点となつてゐる。物語の中心が優美な「ほど／＼のけさう」と滑稽な「はいずみ」との対照は、丁度「このついで」と「はなざくらをる少將」との対比と頗る似通ふものである。

(六)「はなだの女御」の物語梗概は、身分のある好色男が、自分の恋仲であつた女が里に歸つてゐるといふので、本当か一度訪ねて見やうと思ひ、女の部屋近い植込みの陰に隠れて中を覗くと、部屋の中では寛いだ女房たちが自分たちの主人の容貌や身分について、色々の草花に譬へて語り合つてゐる。男は一首の歌をうそぶくと、女房の中には、この好き者の男の仕業に感づいてか、くす／＼と笑つてゐる女もあるやうだといふやうになつてゐる。

一方「貝あはせ」の筋書きは、有明けの月に誘はれた藏人の少将は築地をめぐるす軒の家から琴の音が洩れ聞えるのに心が引かれ、群薄の繁みの中に隠れて、その邸の中を覗いて見た。家の中では女童たちが貝あはせの準備に一生懸命であるので、その仕度に走り廻つてゐる一人の少女に頼み、姫君の部屋の傍

に隠れ場を作つてもらひ、その中に少将は隠れて姫君たちの打ち寛いでゐらつしやるあたりを覗くのであつた。先刻の少女が三四人の少女を連れて来て少将の戸の際で、「こんどの貝あはせには是非勝たせて下さい。」と祈り合ふので、少将は微かな声で歌を口ずさむと、この女童たちは「きつと観音様の声よ」などと言つて、姫君の方へ走つて行つてしまふ。翌日少将は美しい洲浜を例の少女に頼んで高欄の所に置かせ、自分は昨日の隠れ場所に入つて隙間から中を見てゐると、少女たちはその洲浜を見て「仏様のお授けだ」と言つて喜び騒ぐといふのである。以上の通り「はなだの女御」では、好色男が植込みから部屋の中を覗くと、女房たちは自分の主人をそれぞれ草花に風評してゐるのである。男はその女房の中でも女郎花の御方を一段と心にかけるといふのに対し、「かひあはせ」では、少将は群薄の中から貝あはせの準備に少女たちが走り廻つてゐる様を覗くのである。そして翌日少将がこつそり届けた洲浜をそれとも知らぬ少女たちは、その洲浜を見つけて仏の仕業とばかり喜ぶ。隠れ場所から眺めた少将はその美しい様に涙ぐむといふ構想である。このやうに両物語の構成には相似たものがあるけれども、「はなだの女御」では、男は女房たちの容貌へ恋の思ひをかけて覗くのに対し、「かひあはせ」では、少将が少女たちの童心にみとれるといふやうに、両作品には趣向上の対照的な關係を認めざるを得ない。

(四)「逢坂越えぬ権中納言」の概略を記せば、学識容貌のすぐ

れた中納言が六月十日の月の夜、姫君の邸を訪ね、この二人の仲を取り持つ宰相の君に案内されて、姫君の寢室に忍び入つたのである。ところが姫君はどうしても身を許さない。しかも中納言は荒立つ振舞もせず、姫君へ一首の歌を残して寂しく去つて行く。一方「思はぬ方にとまりする少将」では、故大納言の姉妹二人、今は淋しく暮してゐるが、この姉君へは右大将の息子の少将が通ひ、妹君には右大臣の息子の権少将が思ひをかけてゐた。ある時、権少将は中の君へ迎への車を遣はしたところ意外にも姉姫を乗せて返つて来た。だが口巧みな権少将は遂に自分のものにしてしまつた。ところで今一人の少将も、また相手の姫君に迎への車を向けたが、帰つて来た車には中の君が乗つてゐる。少将は意外なこの相手へ「前世からの契りでせう。」などと手馴れに云つて、この姫君を説き伏せ一夜を明かしてしまつたといふ物語になつてゐる。いま「あふさかこえぬ権中納言」と「思はぬ方にとまりする少将」との物語の内容を比較検討する時、両作品とも男女の懸想を取り扱つた物語であるが、「あふさかこえぬ権中納言」では悲恋の中にも中納言が姫君の気持を勞つてあげるといふ、情緒的な雰囲気や物語全体を覆つてゐるのに対し、「思はぬ方にとまりする少将」は右に説く如く、純情な女性が他愛もなく貴公子に弄ばれるといふ事件のもたらす意外な滑稽が作品の山となつてゐる。従つて「あふさかこえぬ権中納言」は宮廷的な作風であるのに反し「思はぬ方にとまりする少将」は卑俗的で全くその趣きを異にするものである。

以上の如く吟味すれば、堤中納言物語における十篇の趣向をば、大きく優美と滑稽との作品に分類することが出来るだらう。つまり(イ)「このついで」・(ロ)「むしめづる姫君」・(ハ)「ほど／＼のけさう」・(ニ)「かひあはせ」・(ホ)「あふさか越えぬ権中納言」の五篇は和歌の宮廷的な余情の感情が流露してゐるのに對し、(イ)「はなざくらをる少将」・(ロ)「よしなしごと」・(ハ)「はいずみ」・(ニ)「はなだの女御」・(ホ)「おもはぬ方にとまりする少将」の五篇は滑稽で庶民的感情が流露してゐるのである。しかも、この(イ)と(ロ)と(ハ)と(ニ)と(ホ)と(ホ)と(ホ)それぞれに含まれる二作品を比較してみる時、表面上それら相對する兩物語の構成は互に似通ふ素因の上に、一方は情趣的とか貴族的な内容であれば、他方はきまつて機智的とか卑俗的な内容の作品とを組み合はせてゐるのである。このやうな配置による物語の對偶關係は、恰も連歌の形式に倣つた構作の如く思はれる。例へば(イ)の「このついで」と(ロ)の「はなざくらをる少将」とは上述の如く情緒と機智、(ロ)の「よしなしごと」と(ハ)の「むしめづる姫君」とは俗物を求める僧侶と物の本地を求める姫君、(ハ)の「ほど／＼のけさう」と(ニ)の「はいずみ」は情緒と滑稽、(ニ)の「はなだの女御」と(ホ)の「かひあはせ」とは、物かげから女房たちを好色の目で覗く男と物かげから少女たちの童心にみとれる少将、(ホ)の「あふさか越えぬ権中納言」と(ホ)の「思はぬ方にとま

りする少将」とは優美に對する機智といふやうに、以上の相對する二作品は全く趣きが相反する組み合わせなのである。

最近国東文磨氏はその著「今昔物語集成立考」の冒頭に「本集の中で、相並んで存在する二説話の間には、その他の説話に比して一段と濃い類似的近縁的性格が見出されるが、それは、この二話のおのおのの説話中の事件とか、人物・事件・場所などが非常に似通つてゐるからであつて、逆にいえば、その二説話はこれらを連想契機として、一括して置かれたものといふる」と述べてゐる。氏は今昔物語の説話の配列は二話一類様式によるものと指摘してゐるのである。また伊勢物語の現存諸写本中、朱雀院塗籠本は第一次伊勢物語の原型と見做されてゐるが、この本は「初冠」の段が最初にあり、「つひに行く」が最後に配されて、全段一五段からなるのである。ところで、この本の章段の配列も二話一類様式を踏んでゐる如く考へられるが、もしさうだとするならば、對の様式を有する堤中納言物語の配列以前にも、これと近似する配列の様式が、既に考案されてゐたことになる。伊勢物語や今昔物語における説話配列の由来はともかくとして、堤中納言物語の對の關係の配列は、この物語の編者が、連歌の二句一聯の唱和にヒントを得ての考案ではなからうか。

元来有心無心兩派のグループが同席で句を付け合つた記録として、明月記建曆二年十二月十日の條に「其事了又出御高陽殿、各応參入、無心宗之輩在東、有心宗在西云々」と伝へ

るし、また同年十二月十八日の条にも「今夜可有有心無心連歌、可参之云々」とも見える。八雲御抄連歌の部に「一、まさなきこと葉よく／＼心得てつくべし。栗下と云ものまじりたるには一定ありぬべき事也。」ともあつて、無心宗の詠んだ句に有心衆がつけた例をあげてある。次に筑波問答の中にも、

後鳥羽院建保の比より、白黒又色々の賦物の独連歌を、定家・家隆卿などに召され侍りしより云々。よき連歌をば柿本の衆と名づけられ、わるきをば栗の本の衆として、別座に着きてぞし侍りし、有心無心として、うるはしき連歌と狂句とをませ／＼にせられし事も常に侍り云々。

と見える。この本文中の「有心無心とて云々」について、岩波書店発行日本古典文学大系六十六、木藤才藏・井本農一校註「連歌集・俳論集」では次の如く注記してゐる。すなわち、「和歌的情趣をたたえた優美な連歌を有心連歌と云い、歌人でない人々の催す滑稽な連歌を無心連歌と云つた。有心連歌の好士と無心連歌の好士が同席して、有心と無心の句を交互に続けていくのを有心無心連歌と称した」とある。上例の諸文献によれば、すくなくとも二条良基（二三〇—一三八八）頃には和歌の風尚を尊ぶ堂上連歌と機智的な地下連歌による二句一聯の連歌が唱和されたことは明確な事実となつてゐる。

ところで、堤中納言物語の成立について私は、雑誌文学語学昭和三十六年十二月号所載拙稿「堤中納言物語『よしなしごと』の研究―典拠並びに成立について」と題する小論の中で発表したことがある。行文の都合上、その当該文の一節を掲載すれば、

次の通りになる。

このやうな諸考証に拠つて推定してみると「よしなしごと」を含む十篇の短篇物語を取めた所謂堤中納言物語は、少くとも元弘二年（一三三一）から元中二年（一三八五）までの間に、誰かの手によつて集録されたものである。

右の事情から考察すれば堤中納言物語の成立年次は、元応二年（一三三〇）に生れて嘉慶三年（一三八八）に薨じた二条良基の年代と略々一致することになる。従つて前項の推論、つまり堤中納言物語十篇の配列の趣向を、当時催されてゐた有心無心付合はせの唱和連歌の趣致を模して、このやうに配列したものであらうと考へる時、本物語成立当時には、そのやうな連歌の付合ひが行はれてゐたので、年代的には両者の間には何等矛盾するものではないだらう。この短篇物語の目次については、上述の通り契沖校本のそれが原型と思ふのであるが、いまその旁証の一つとして次のやうなことが云へると思ふ。

現存諸本における十篇の配列順序をば総て二話一対の様式によるものと看做し、これらの組合せ中、いづれの本が最もその共通な二話一類のものを有するかを吟味するに、それは契沖校本である。つまり契沖校本の「花ざくらをる少将」と「このついで」の対の形は、他に池田亀鑑博士藏榊原忠次旧藏本、流布本系統の諸本にも見えるし、また契沖校本の「ほど／＼のけさう」と「はいずみ」の対は、天理図書館藏岡本鮎校合本のそれとも同一な形となつてゐる。更に契沖校本の二話一類の形式を

検討するに、二話の中貴族的なもので季節的に早い方を初めに配し、地下的なもので季節的に遅い方を後に並べて一對としたかの如く窺はれる。この見地からすれば、上に説く榊原忠治旧藏本や流布本の「はなざくらをる少将」と「このついで」、また天理図書館藏岡本贗校合本の「はいずみ」と「ほど／＼のけさう」などの並べ方は、契沖校本の順序を交替の形にしたものと同じ体裁になつてゐる。案ずるに契沖校本以外の十篇配列の異なる種類のものは、堤中納言物語の成立以後に原型の趣向を模しながらも、配列に新味を凝らし、それぞれ独自の關係に考案されたものでなからうか。かう考へる時、堤中納言の編者は、時代的に推定して中世の元弘二年（二三三二）から元中二年（二三八五）の間で、国文学に造詣深く、連歌を愛好し、しかも独自の規則式目による排他的な連歌ではなく、堂上連歌にも地下連歌にも理解を有する人であつたに相違ない。この観点から推定する時、二条良基（一二三〇—一三八八）は最もそれに適當する方のやうに思はれる。良基は筑波問答の中で

連歌は前念後念をつがず。又盛衰憂喜、境をならべて移りもて行くさま、浮世の有様にことならず。昨日と思へば今日に過ぎ、春と思へば秋になり、花と思へば紅葉に移ろふさまなどは、飛花落葉の観念もなからんや

とも述懐してゐる如く、彼は連歌の特性の中心を逸興にあるとしてゐる。堤中納言物語十篇中、優雅・情趣、式は優美な中に一面滑稽や機智を弄する物語には、上述する通り「このついで」・

「虫めづる姫君」・「ほど／＼のけさう」・「貝あはせ」・「あふさかこえぬ権中納言」の五作品がある。また機智・滑稽、式はこれら機智の中に情趣的なものを持つものには「はなざくらをる少将」・「よしなしごと」・「はいずみ」・「はなだの女御」・「おもはぬ方にとまりする少将」などの五篇がある。「堤中納言物語」の編者は誰であるか今日全くわからないけれども、物語の編者が十篇をこのやうに微妙な二情調形に分けた上で、上述する如く趣向の似通ふものを二句一聯の形に並べたものが、堤中納言物語であるならば、或は良基は連歌の持つ逸興をこの物語の配列にも生かしたものであらうかとも考へる。なほ、以上の十篇を編し、その題名を「堤中納言」と命名した人は、なんとしても二条良基らしいといふ纏めた委細な論述は、紙数の關係上本論では割愛し、本年度中別の機会に発表する計画になつてゐるのである。